

歯学部



歯学部本館（附属病院を含む）



10号館壁面レリーフ

Message

歯学部長挨拶

歯学部長
依田 哲也
Tetsuya Yoda



世界の
口腔科学拠点として
発展し続けます

わが国最初の官立歯科教育機関設立に向けて、「歯科高等教育機関設置に関する法案」が帝国議会を通過したのは、1922（大正11）年初春のことでありました。翌1923年度の国家予算に組み込まれる予定でしたが、同年に発生した関東大震災のために計画が大きく遅れ、本学の前身である東京高等歯科医学校が創立したのは、6年後の1928年（昭和3）年になりました。もし、予定通りに創立されていればちょうど100周年での新大学移行だったかもしれません。

創立以来、本学はわが国を代表する歯学教育研究機関として歩み続けております。現在では6年生の歯学科と4年生の口腔保健学科（口腔保健衛生学専攻、口腔保健工学専攻）を有し、医療人としての全人的視点、科学的な探求心と問題解決能力、さらには国際的な視野も備え、指導的役割を果たすことのできる歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の養成に取り組んでおります。

特に、日本最大規模の大学病院（歯系診療部門）を中心に行われる臨床教育では、国内トップレベルの実践的な診療参加型実習を行っており、知識・技術の習得だけでなく、歯科医療のプロフェッショナルに必要な人間性やコミュニケーション能力を育む絶好の機会を提供しております。

また、本学は東京・関東圏で唯一の国立大学の歯学部ということもあり、本来の実力以上に世界から注目される存在でもあります。海外の学術交流提

携大学歯学部も50校以上を数え、毎年多くの学生を海外研修に派遣しているとともに、毎週のように世界各国からの学生研修や歯学部長等の訪問を受け入れています。大学院では、約半数が海外からの留学生となっており、修了生が母国の大学に戻って、教授や歯学部長として活躍されている方も増えてきました。

2016年からは最先端口腔科学研究推進プロジェクトを発足させ、口腔科学のグローバル拠点となるべく、パーチャ

ルではありますが、大学内の分野や部局をまたいだ研究推進体制を強化してきました。2022年には本学が指定国立大学法人となり、その重点研究領域の一つとして「口腔科学」が位置づけられたことから、ますますその重要性が認識され、2024年には2部門の専任教員、2000㎡規模のスペースを確保した「口腔科学センター」を発足しました。口腔と全身のクロストークの解明や、咀嚼・嚥下等の口腔機能評価デバイスの開発、貴金属から完全に脱却した歯科修復マテリアルの開発などを推進し、学内外の口腔科学研究をサポートするとともに、大型研究費の獲得や国際連携研究の拠点となることを目指します。東京工業大学や産業界からの協力もお願いして、新大学の目玉の一つになることが期待されます。

現在、分野別QS世界大学ランキング2024の歯学分野で、日本国内第1位、世界第4位と毎年大変高い評価をいただいておりますが、この現状に満足せず、さらに飛躍しなければなりません。新大学となることが、口腔科学研究や教育の世界的な拠点として、さらなる発展を遂げる追い風になると確信しております。そして、それらの教育や研究成果が、臨床、社会に還元され、全世界の人々の健康に寄与することを心より願っております。

1985年東京医科歯科大学歯学部卒業、1991年同大学大学院修了。1992年同大学口腔外科学第2講座助手。1994年ドイツ国立ボン大学研究員。2001年東京大学医学部附属病院顎口腔外科・歯科矯正歯科講師。2003年埼玉医科大学医学部口腔外科学教授。2018年東京医科歯科大学大学院顎顔面外科学分野教授、現在に至る。2019年同大学理事・副学長。2020年同大学歯学部長、現在に至る。

患者診療を通じて、歯科医師の心・技術を学ぶ 診療参加型臨床実習

歯学部設置以来の伝統

～社会とともに歯科医師を育む教育～

1928(昭和3)年に東京高等歯科医学学校設置から始まった歯学部の歴史においては、1946(昭和21)年の東京医科歯科大学歯学部設置以来引き継がれる伝統の一つとして、「学生時代に診療現場で経験を積む教育」の実践があげられます。社会に歯科医療を通じて貢献をする一人の歯科医師・プロフェッショナルの資質としては、単なる知識・技術の修得にとどまることなく、患者の状況を的確に判断し診療をする応用力、個々の患者に寄り添い安心・安全な歯科医療を提供する能力、利他的な姿勢や高い倫理観が必要となります。そのために、高度な歯科医学の修得や研究マインドの醸成機会となる様々な授業とともに、複数年をかけて実際の臨床現場で、歯科医療現場の臨床医の一員としての経験を段階的に積むためのカリキュラムを提供しています。このカリキュラムは、世界各国の歯科医学教育では共通理解をもって行われている、いわゆる「世界標準」の教育カリキュラムですが、長期間にわたりこの臨床教育を世界標準レベルで継続できているのは、教員だけではなく、本大学病院歯系診療部門に通院・入院されている患者の皆様のご理解、厚いご協力があるからこそであり、

本学歯学部と社会との強い結びつきを感じる場でもあります。

初学からの段階的な学び

～成長を促すカリキュラム～

歯学科では、本大学病院歯系診療部門の各診療科・専門外来や病棟での臨床現場を経験する授業科目として、早期臨床体験実習(1年)、歯科医療基礎実習 I-III(2年～4年)、包括臨床実習(5年、6年)を設定しています。これら診療現場を学びの場とする教育と並行して、基礎・臨床系専門科目の学びを通し、臨床に必要な知識、臨床技能の修得を進めるカリキュラムとなっています。歯学科の教育理念「豊かな人間性を有し、使命感をもって全人的な歯科医療を実践し、国民の健康の維持・増進に寄与するとともに、国際的視野から歯科医学・歯科医療の向上に貢献できる指導者を育成する」を実現するために、入学から卒業までの学年進級に合わせ、外来見学、上級生の診療現場(第1総合診療室(学生診療室))での体験、実際の歯科診療の実践と、長期的に臨床経験を積む設計となっています。

患者診療を通じた学び

～診療参加型臨床実習～

その中でも、5年次から開始される包括臨床実習については、公的な全国統一試験である共用試験に合格した学生

が実際に患者診療を行います。カリキュラム上では実習として扱われますが、歯科医療現場の観点からは、指導教員のもとで学生自身が患者担当医として診療に責任を持ち、患者の医療面接、診断、診療計画の立案、処置、予後観察、メンテナンスに至る包括的な治療を担当し、一般歯科診療の臨床経験を積むこととなります。また、各専門診療科配属においては、指導医の診療の見学、補助を通して専門科診療に関する学びを深め、口腔外科病棟配属においては、全身麻酔下での外科手術への参加など、一般歯科診療所では経験できない現場での学びを深めることができます。

共に学び、教え合い、深める学び

～多職種連携実習～

医療・歯科医療の複雑性、多様な場

診療参加型臨床実習の様子



面に対応するために、様々な医療・歯科医療専門職との良好な協働を通して、患者診療を提供することが必要な時代となっています。本学では、2011年より医歯学融合教育に始まった多職種連携教育の導入を推進しており、全学的には、多職種との協働の重要性、自らのプロフェッショナルとしての責務を学ぶ機会として、多職種連携I(1年)、多職種連携II(3年)、多職種連携III(6年)が合同演習として行われます。これら演習活動で多職種連携活動への基本的な姿勢を修得しますが、歯学科では、6年次に多職種協働を実際に体験する臨床実習として、歯科衛生士を目指す口腔保健衛生学専攻4年生とのD6-OH4連携実習、歯科技工士を目指す口腔保健工学専攻4年生とのCAD/CAM実習、また、医師を目指す医学科6年生との合同実習(緩和ケア病棟実習)を行っています。特に、D6-OH4連携実習については、それぞれの学生がプロフェッショナルとしての責務のもと、実際の患者に対して最良の診療を提供し、その過程において連携の重要性を学ぶ実習であり、2015年導入当時は世界に先駆けての取り組みで、現在、その教育スタイルが世界に広まりつつあります。歯科医療の実際の現場では、歯科医師一

人で診療を行うことはなく、様々な職業の方達との協働により質の高い歯科医療を提供することとなります。歯学科では、時代とともに変化する実現場、実社会で活躍できる歯科医師の基本的な資質・能力の育成についてその必要性を重んじ、常に将来を見据えた教育を展開しています。

日本最大規模の歯系診療部門での 卒後歯科臨床研修

本大学病院歯系診療部門は、7つの診療領域からなり、1日平均1,400名の患者が来院しています。日本において歯科医師は歯学科を卒業し歯科医師国家試験合格後1年以上の臨床研修をすることが義務となっており、大学病院は研修歯科医の研鑽の場としての役割も持ち合わせています。本大学病院歯系診療部門は、1987(昭和62)年に歯科医師臨床研修制度が厚生省(当時)の委託事業として発足して以来、2006(平成18)年に必修化され現在に至るまで、全国的にも人気の高い臨床研修施設の一つであり、本学卒業生に加え、全国の歯科大学・歯学部の卒業生を多数受け入れています。歯科診療に必要な基本的な診療能力に加え、訪問歯科診療や周術期口腔管理など今後ますます対応

が求められる領域への対応能力を修得できる診療参加型の研修を基本とした、それぞれの研修歯科医が望むキャリアパスにあった異なる特徴を持つ3つのプログラムを設定しています。本院には研修歯科医専用の診療室があり、通院されている多くの患者の皆様のご協力とご理解のもと研修が行われています。

世界最高峰の教育を提供する 歯学部へ

本学は、分野別QS世界大学ランキング2024の歯学分野で世界第4位と、世界最高峰の歯系大学院・歯学部として高い評価を得ています。大学院での研究活動も盛んであり、基礎領域に限らず、臨床領域でも本学歯学部が世界に広めた歯科材料や術式が数多くあります。日本、世界を活躍の場とする教員があらゆる場面で学生教育に直接関わっていることは、本学歯学科の大きな財産でもあります。特に多くの教員が教育参加する歯学科においては、日常のチェアサイドでの指導の場が、現在の歯科界のフロントランナーである教員から、将来の歯科界を率いる学生へのバトンが引き継がれる場ともなっています。目指す将来像として掲げられる Clinician Scientist、Scientific Clinicianのいずれにおいても、伝統として引き継がれてきた患者診療現場で経験を積む教育は必須のものです。これまでの96年間、社会のニーズに的確に対応し未来を創ってきた歯学部歯学科は、これからの100年もこの伝統を引き継ぎ、日本・世界を活躍の場とする歯科医師を育成する使命のもと、最良の教育を提供していきます。

重点研究領域『口腔科学』

本学では2022年度から指定国立大学法人となるに伴い、『創生医学』・『希少疾患・難病』ならびに『口腔科学』の3つの重点研究領域が設置されました。各領域は領域横断型の構成として、年複数回の重点研究領域会議を開き、異分野研究者間におけるディスカッションによる新たなアイデアの創出、重点研究領域内共同研究による外部の競争的研究費の獲得により重点研究領域をさらに充実させることを目標とします。『口腔科学』重点研究領域は、口腔領域に特化した研究領域です。

少子高齢化による急激な社会構造の変化により、我が国の口腔疾患の疾病構造は大きく変化しました。歯を治すことを中心とした医療から、口腔を通して全身を診る医療へと変遷しつつあります。う蝕や歯周病、さらには口腔がんや口腔顎顔面形成異常による歯の喪失や口腔機能障害は、食べる・味わうという生きる楽しみ・意欲を奪うのみならず、全身フレイルの引き金となり、

認知機能および運動機能を含めた心身機能の低下という負のサーキットを加速させます。さらに、これまで病原性微生物という認識で研究されてきた微生物研究は、今日では微生物叢として宿主を助ける究極のエコシステム(生命共同体)を形成していることが明らかになり、腸内細菌叢に加えて、外界との入り口に存在する口腔細菌叢の構成とそのバランス異常は、口腔のみならず全身疾患の発症・増悪に関与しています。また、鼻腔および口腔から始まる上部呼吸器系および消化器系粘膜は、解剖学的に複雑な構造下にある上、呼吸や摂食による微生物や物理化学的な種々の刺激に曝されています。それゆえに、独特の炎症や発がん制御機構が存在していますが、一旦炎症性変化やがん化が生じた場合は、頭頸部領域というその特性を理解して、早期診断や機能温存を目指した新規治療法開発に取り組む必要があります。

このような背景の中で、本学歯学部



口腔科学OS (Oral Science) ロゴ

では、2016年より最先端口腔科学研究推進プロジェクトとして、「形づくり(頭蓋顎顔面形態形成)」「バランス(口腔炎症・免疫)」「難病(がん)」「働き(口腔機能)」「材料(生体再生・再建)」に「社会・教育(社会医学・人材開発・国際連携)」を加えた6ユニットを形成し、学部内での基礎・臨床連携の研究推進を展開してきました。本重点領域研究では、これまでの最先端口腔科学研究推進プロジェクトを発展させ、全学レベルでの学内連携研究を推進し、口腔科学のグローバル研究拠点となることを目指して取り組んでいます。高次複雑系の生体において、口腔と全身との連関システムを科学的に理解し、「口腔から全身を診る」、「口腔から全身を治す」、「口

腔から予防する」という“口制御”による口腔からの先制医療を発信することを目指しています。口腔からの先制医療の実現は、政府の目標である健康寿命の延伸と医療費削減に大きく貢献でき、歯学分野で世界トップを目指す本学が推進すべき研究です。また、本領域研究推進を通して、次世代を担うグローバル人材、特にクリニシャンサイエンティストを育成しています。

OS-1、OS-2、OS-3の3研究プロジェクト

本研究領域では、東みゆき領域長と上阪直史副領域長の下で、OS-1、OS-2、OS-3の3研究プロジェクトを組み、各プロジェクトは指定研究者および公募研究者で推進させています。

OS-1 口腔内細菌叢と全身のクロストーク

プロジェクトリーダー：片桐さやか
指定研究者：片桐さやか、鈴木敏彦、戸原玄、宮坂尚幸、森丘千夏子
公募研究者：野口麻衣子、田村起紘、堀武志、石丸美穂

宿主の摂取する食餌や薬剤、口腔衛生状態からくる口腔粘膜の炎症、唾液の量や質などによって口腔細菌叢が変化すると、局所的に細菌叢のバランスが崩れた口腔細菌叢のディスバイオーシスが生じ、様々な全身疾患に影響をおよぼすことが推察されています。本プロジェクトでは、口腔細菌叢のディスバイオーシスがどのように口腔局所応答を変化させ、同時に全身の臓器および全身疾患に影響をあたえるのかを、

臨床疫学および基礎的な細胞レベルおよび分子レベル研究での基礎・臨床融合研究を実施します。口腔内状態の評価・診断および口腔細菌叢の評価が、全身疾患の予知・予防に、さらには、口腔内の健康改善が全身疾患の予防・改善へと繋がるエビデンスを構築します。口腔から全身状態と全身疾患を予知予防する先制医療を目指しています。

OS-2 頭頸部微小環境

プロジェクトリーダー：渡部徹郎
指定研究者：渡部徹郎、東みゆき、原田浩之、朝蔭孝宏、加納嘉人、樗木俊聡、梶弘和

公募研究者：木村雄亮

頭頸部領域における粘膜組織は生理的に特有の機能を有し、呼吸や摂食などの日々の営みや喫煙などの生活習慣によって、外来から種々の刺激を受けています。頭頸部がんおよび難治性粘膜疾患の発症機序は複雑です。頭頸部がんにおいては、拡大手術やネオアジュバント療法により手術適応が広がったものの、再発・転移症例のコントロールは今なお困難をきわめ、化学療法・放射線療法・免疫療法などの適切な複合療法によるQOLを維持した低侵襲治療法の選択と開発が望まれます。本プロジェクトにおいては、難治性粘膜疾患および上皮発がんに関わる制御遺伝子・分子の同定や、頭頸部がんの微小環境ネットワークシグナルの解明を通じて、頭頸部領域の特殊性を明らかにするとともに、希少がんであり、外科療法によって患者のQOLの低下を招きやすい

頭頸部がんの非/低侵襲治療法を開発することでアンメットメディカルニーズの課題解決を図ります。

OS-3 口腔システムー脳連関

プロジェクトリーダー：上阪直史
指定研究者：小野卓史、上阪直史、山田哲也、高橋英彦
公募研究者：松山祐輔、西田陽一郎、小野岳人、田中大介、大杉勇人

加齢や障害に伴う認知症などの脳機能低下は、少子高齢化社会の医療の大きな課題です。近年、歯の喪失、咀嚼能力の低下、歯周病といった口腔システムの不全が脳機能低下のリスクファクターであることが分かりつつあります。これらのエビデンスは、口腔システムー脳連関の観点から脳疾患を捉えることで脳疾患の革新的な予防法・治療法の開発につながることを示しています。OS-3では、口腔システムの健全な発達や維持の基盤となる神経メカニズムと疾患や加齢による口腔システム不全が脳に与える影響を明らかにし、すべての世代において食べる・飲み込むなどの口腔機能を向上・維持させ、食べる楽しさや生きる意欲を高め、脳機能を向上・維持させることで、健康長寿社会の推進に貢献していきます。



東みゆき 領域長



上阪直史 副領域長



ミーティング写真

歯学部国際交流活動 「タイ拠点形成ーアラムナイコネクションの重要性ー」

歯学部では、現在、25の国と地域で、56にもおよぶ歯科大学・歯学部と学術交流協定を締結し、活発な国際交流を行っています。積極的に留学生を受け入れ、これまで900名近い大学院修了者を輩出してきました。この同窓生は、国際交流活動のキーパーソンとして重要な位置を占めています。

タイ拠点形成

本学の海外3拠点のうち、タイ拠点は歯学部がリードして形成されました。1991年にチュラロンコン大学歯学部との学術協定交流を締結した後、チュラロンコン大学において若手教員研修やシンポジウムを実施し、文部省科学研究費国際学術研究「重度顎顔面欠損症の研究」(1993～1995年度)に採択されました。この共同研究は、日本学術振興会拠点大学交流による支援につながり、1996～2005年度には13の共同研究が行われました。この期間には、チュラロンコン大学のみならず、タイの歯学部からの留学生が増加しています。

このような背景により、2008年11月

にチュラロンコン大学学長と本学学長によって合意書が締結され、2009年11月にチュラロンコン大学歯学部内にチュラロンコン大学・東京医科歯科大学研究教育協力センター(CU-TMDUセンター)が設置されました。同センターは、医歯学教育や共同研究の推進、本学への留学希望者への情報提供、元留学生へのサポート、さらにタイ在住の日本人への健康教育支援や情報提供を行うことを主な目的としています。歯学部では、このセンターを中心として東南アジア歯科医療従事者等に対する生涯研修コースの提案・実施、および東南アジア在留邦人や日本人学校に対する健康教育や医療情報の提供を行っています。現在は本学大学院修了者がセンターを管理しています。

キーパーソンの育成

キーパーソンの存在は、拠点形成などの活発な国際交流活動の開始、維持、発展に欠かせません。1984年に設置された歯学部国際交流委員会は、歯学系分野・部門および全学の組織(留学生専門委員会→留学生センター→国際交流センター→統合国際機構)との協力体制により、一貫して留学生に関する、国際的歯学学術協力並びに歯科医療協力に関する連絡・調整、歯学部学生・大学院生等に対する国際協力に関する教育などを行ってきました。

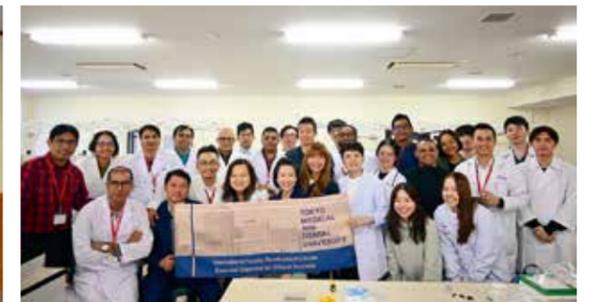
大学院歯学系では、1998年度から現在まで、日本政府奨学金である「国費外国人留学生(研究留学生)の優先配置を行う特別プログラム」に継続して採



ISP2023のフェアウェルパーティー

択され、英語で教育研究を行う特別プログラムを提供し、優秀な博士課程大学院生を受け入れています。さらには、国際的リーダーになりうる高度専門医療人の育成を目的として、2015年11月にチュラロンコン大学と「ジョイントディグリープログラム開設に関する協定」を、歯学分野では日本で初めて締結しました。両大学が共同でカリキュラムを運営し、2016年に東京医科歯科大学・チュラロンコン大学国際連携歯学系専攻を設置しました。

優秀な大学院生確保のために海外学生への本学紹介も積極的に行っています。国際サマープログラム(ISP)の歴史は、全学プログラムとして2009年度から2015年度まで継続的に実施し、その後の中断を経て、2019年度には医学系のみで実施されました。ISP2023は、COVID-19により中断していた本学の対面での国際交流を本格的に再開するイベントとして、歯学部国際交流委員会が企画し、8ヶ国(インドネシア、スリランカ、フィリピン、ベトナム、英国、中国、韓国、タイ)12協定校から19名が参加しました。



International Faculty Development Course (2022年度)

これから

拠点形成の経験を基に、「東南アジアにおける医歯学教育研究拠点推進事業」(2012～2015年)、「東南アジアにおける歯学教育研究拠点世界展開事業」(2016～2021年)の採択によって、先端的歯科医療・歯学教育・研究のコースを本学大学院生(Essential Expertise for Clinical Dentistry: EECDD)や世界の歯科医療従事者(International Faculty Development Course: IFDC)に提供し、世界トップレベルのTMDU型教育の展開を推進しています。

国際共同研究についても、拠点形成時の共同研究の経験を生かし、現在は各専門分野において、協定校も含めた多くの海外の歯科大学・歯学部、研究所等と活発に行われています。さらに、複数の専門分野にまたがる共同研究プロジェクトによる研究者交流も行われています。

国際交流の活性化には時間を要しますが、現在は、オンラインの利用によりある程度時間を短縮することが可能です。しかしながら、教育・研究・診療におけ

る真の国際連携・協力体制を構築するためには、リアルな場で人材交流を深め、歴史や文化も含めた相互理解に基づく信頼関係を築くことが肝要です。COVID-19によって中断したリアルの交流が再開したことを機に、現時点で広がっている個々のネットワークの中から、強化すべきつながりをより強固な海外ネットワークへと拡充します。また、拠点形成と1983年に韓国国立ソウル大学歯学部との交流協定締結に始まった約40年間の国際交流の経験を生かして、新たな交流の構築を模索します。そして、日本の歯学教育・臨床・研究を世界に展開し、本学歯学部の国際競争力の向上を目指していきます。



タイ拠点でのセミナー



ヨセポリ大学の学生と依田歯学部長

統合を契機に医歯学工学の
更なる発展と次世代育成に
向かって交流を深めよう



歯科同窓会 会長

浅野 正樹

Masaki Asano

歯科同窓会は、1934(昭和9)年6月3日に設立されました。現在会員数は4,800名余りで、全国46の地区に分かれ活動を行っています。初代会長は、東京医科歯科大学の創設者でもある島峰徹先生です。その後、1965(昭和40)年に開業医として初めて野村順之助先生が会長になりました。野村会長は同窓会の存在意義として「学術と親睦」を掲げ、1971(昭和46)年からは、学術事業すなわち卒業後研修事業(現在C.D.E)を開始しました。この事業では学術講演会と共に他の歯科大学同窓会にはない実習を伴った研修を行い、全国から多数の受講生が参加しています。また、年に数回、様々な分野にわたる講演会を開催しています。健康に関することや医療管理に関わることあるいは国会議員を招いてその時々々の国の動きといった内容で講演していただいております。

歯科同窓会は、2022年4月1日より一般社団法人となり、今年で創立90年を迎えます。2024年8月31日には記念事業として式典・講演会・祝宴を予定しております。また、東京医科歯科大学全学の同窓会の組織である「お茶の水会」の運営にも携わっていますが、2024年10月に統合する東京工業大学の同窓会である「蔵前工業会」と交流を図り、今後の同窓会の在り方について考えていきたいと思っています。新たに誕生する「東京科学大学」に期待するとともに、新しい広報誌の誕生を願っています。

1973年3月東京医科歯科大学歯学部卒業。2007年7月社団法人日本歯科医師会常務理事。2007年10月東京都知事賞受賞。2011年10月東京医科歯科大学歯科同窓会会長就任。2011年11月厚生労働大臣賞受賞。2015年6月公益社団法人日本歯科医師会専務理事。2018年4月旭日双光章受章。



校友会会長

高柳 敦

Atsushi Takayanagi

東京医科歯科大学と東京工業大学とが統合して東京科学大学となる前の最後の『Bloom! 医科歯科大』に東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻の同窓会「東京医科歯科大学校友会」の代表としてご挨拶いたします。

東京医科歯科大学の歯科技工教育は1929(昭和4)年の「技工手養成科」からはじまり、設置時は東京医科歯科大学の前身の「東京高等歯科医学校」でした。そして戦後の1946(昭和21)年には東京医科歯科大学(旧制)として再編成されました。養成科時代の先輩方には、本年と同様、在学中に大学の名称が変わるという経験があったかと思います。その後1952(昭和27)年に「東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校」となりました。さらに2011(平成23)年には「東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻」が設置され、2024(令和6)年3月には10期生が卒業いたしました。さらには医歯理工保健学専攻(修士課程)および生命理工医療科学専攻(博士課程)へと進む途も整いました。

工業科学界における我が国のトップレベルである東京工業大学との統合を果たすことは、口腔保健工学専攻にとりましても専門分野として相性の良さを想起させます。医歯学工学系の研究のさらなる発展を待望させ得る大きな転換点となることを切望いたします。

1988年東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校本科卒業、1990年東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校実習科修了、同年木本歯科勤務、1994年高柳歯科技工所勤務、2019年東京医科歯科大学校友会会長就任、現在に至る。



お茶の水さつき会 会長

十川 裕子

Yuko Sogo

この度は、東京医科歯科大学が東京工業大学と統合されるという重大な節目を前に、最後の『Bloom! 医科歯科大』に寄せて、さつき会会長としてご挨拶を申し上げます。

お茶の水さつき会は1951(昭和26)年に開校した東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校の卒業生と、2004(平成16)年に同校を継承発展させる形で新設された歯学部口腔保健学科口腔保健衛生学専攻の卒業生および在校生で組織されている同窓会です。設立から70年が経過し、現在1,000名ほどが所属しています。当会員は、開業歯科医院や病院歯科、行政、企業など様々な現場で活躍するのみならず、歯科衛生士という職能を活かしながら社会の多分野で活躍しているメンバーもいます。そのような方々の中に、現在注目されていることも食堂の名づけ親であり、「きまぐれ八百屋だんだん」を運営されている28回生の近藤博子さんがおられ、2023年度さつき会特別講演の講師をお願いしました。その他の活動としては、さつき会便りの発行や年3回の理事会、講演会などの開催を通して会員の縦と横のつながりを強化することや、在学生に対して留学支援などを行い、グローバルな活躍を期待しています。今後も歯科衛生士として社会のニーズに対応するための研鑽・研修機会の提供、社会貢献活動など、多岐にわたる活動を行っていきたくと考えております。

1982年東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業。1982年医療法人社団恒心会ニコレイ歯科就職、1985年日本放送協会健康保険組合入職、1999年介護支援専門員取得、1996年～2005年千代田区保健所他非常勤勤務。2005年放送大学学士課程終了。2005年東京医科歯科大学病院就職、2020年同退職、再任用(現在)。